

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）

様々な依存症の実態把握と回復プログラム策定・推進のための研究
（研究代表者 宮岡 等）

平成 26 年度分担研究報告書
病的ギャンブリングの実態調査と回復支援のための研究

研究代表者 宮岡 等 北里大学医学部精神科学主任教授

研究要旨

アディクションは、当事者のみならず家族を巻き込む病気であるとされ、逆に家族との関係性が、依存行動を助長することも指摘されている。病的ギャンブリング（以下 PG）でも同様の状況があることが予想されるが、アルコール薬物依存症ほど実証的なデータに乏しい。そこで、本研究では、病的ギャンブラーのギャンブル行動や家族関係に対する家族と本人の意識について明らかにすることを目標に「研究 1：病的ギャンブリングに関する家族の認識と、変化のプロセス」と「研究 2：病的ギャンブリングと家族関係に関する家族・当事者のアンケート調査」という 2 つの研究を行った。さらに、ギャンブリングにより引き起こされる問題のひとつに借金のトラブルがある。そこで「研究 3：債務問題支援機関における病的ギャンブリング問題に関する研究」を行い、家族と借金問題の関連について考察した。

研究 1 では、家族の病的ギャンブリングに関する認識と、変化のプロセスを明らかにすることで、変化の時期に合わせた介入方法を検討することを目的とし、病的ギャンブラーの家族に対して面接調査を行った。分析にはグラウンデッド・セオリー・アプローチを用い、継続的比較分析法により理論的飽和に達したと判断された 8 人で分析を終了した。家族のギャンブル問題認識には 4 つのステップがあり、理想のパートナーを追い求める、青天の霹靂の如く借金に遭遇する、怒りと不安が交錯する、追い込まれ、治療や施設に結びつく というプロセスを経ることが明らかとなった。家族は突然多額の借金に直面し、心理的・社会的に大きなダメージを受けることとなる。一方、ギャンブラー本人が治療や施設に繋がる直前まで、本人・家族ともに「ギャンブル依存症」であることを受け入れられない現状があることが明らかになった。

研究 2 では、家族関係とギャンブル問題の関係や、家族と当事者の意識の違いについて明らかにすることを目標に、当事者と家族に対してアンケート調査を行った。調査内容には、ギャンブルの状況、SOGS、ギャンブルの動機・結果・対処に関する質問票、FACESKG -8（家族機能システム評価）、K6 が含まれている。当事者のアンケート結果によれば、FACESKG -8 の「きずな得点」が低い群ほど、現実逃避や気晴らしを目的にしてギャンブルを行う傾向が強く、ギャンブルした結果としてかえって虚無感を味わっており、ギャンブル対処において否認・責任転嫁の方法を用いる傾向が強いことが明らかになった。また「きずな得点」の低い群は、それ以外の群より、K6 得点が有意に高く精神健康状態が低下していた。一方、家族アンケートでは、FACESKG -8 の「かじ取り得点」が高い群（家族役割が硬直している群）では、ギャンブラーの自己コントロールが不足し、精神健康の低下を生じているという結果であった。これらの所見から、家族における絆の喪失や膠着した関係性が、ギャンブル問題や精神健康の悪化に関係していることが確かめられた。さらに家族と当事者の認識を比べると、家族は当事者よりもギャンブル問題や当事者の精神健康の悪化を深刻にとらえており、当事者はギャンブルをしても望んだ効果を得ていると考える傾向が強く、家族は当事者の現実否認の態度を当事者よりも強く意識していた。こうした認識のずれを埋めていく介入が必要であることが示唆された。以上の質的・量的研究を通して、病的ギャンブリングの進行と家族問題の結びつきが明らかになったといえる。こうした家族や本人のダメージの深刻化を食い止め回復を促進するためには、家族と当事者双方がギャンブル問題に適切に理解・対応できるための情報伝達や情緒的な援助を行うとともに、当事者と家族のコミュニケーションを助けていくことが重要であると思われた。当事者・家族を含む支援のためには、自助グループと医療保健福祉が統合的な支援体制を組むことや、CRAFT（Community Reinforcement

and Family Training : コミュニティ強化と家族訓練)などの家族への心理教育プログラムの提供などが必要であるといえる。

研究3では、多重債務に関する相談におけるギャンブル問題の頻度を明らかにすることを目的とし、関東圏内の債務問題への支援を行っている関連機関、司法書士会に協力を依頼した。調査には日本語短縮版 SOGS を用い、調査参加者 104 名のうち 9 名に病的ギャンブルの可能性があると結果を得た。このことから、債務問題を扱う担当者は、ギャンブルを含め、どのような問題が生活を困難にさせているかということと相談者とともに考えていくために、詳細な情報収集や問題整理を行うことが必要と考えられる。

研究協力者

田辺 等 北海道立精神保健福祉センター
石川 達 東北会病院
森田展彰 筑波大学 医学医療系
新井清美 首都大学東京 健康福祉学部
松本俊彦 独立行政法人 国立精神・神経医療
研究センター 精神保健研究所
後藤 恵 成増厚生病院
伊波真理雄 雷門メンタルクリニック
樋口 進 独立行政法人国立病院機構 久里
浜医療センター
河本泰信 独立行政法人国立病院機構 久里
浜医療センター
神村栄一 新潟大学 教育学部
岡崎直人 さいたま市こころの健康センター
稲村 厚 稲村厚事務所
田中克俊 北里大学大学院 医療系研究科
蒲生裕司 こころのホスピタル町田
村井俊哉 京都大学大学院 医学研究科
吉田精次 藍里病院
森山成彬 通谷メンタルクリニック
赤木健利 桜が丘病院
内田恒久 大悟病院
西村直之 あらかきクリニック

A . 研究目的

我が国では、かねてよりアディクション問題
と言えばアルコール問題が論じられてきた。し
かし、近年は、アルコール以外のアディクシ
ョン問題を持つ者が増加してきたことに伴い、
様々なアディクション問題に関する多くの報
告がみられるようになっている。アディクシ

ョンは、当事者のみならず家族を巻き込む病気
であるとされ、逆に家族との関係性が、依存行
動を助長することも指摘されている。病的ギ
ャンブル(以下 PG)でも同様の状況がある
ことが予想されるが、アルコール薬物依存症
ほど実証的なデータに乏しい。そこで、本研
究では、病的ギャンブラーのギャンブル行
動や家族関係に対する家族と本人の意識につ
いて明らかにすることを目標に、「研究1 : 病的
ギャンブルに関する家族の認識と、変化のプロ
セス」と「研究2 : 病的ギャンブルと家族関
係に関する家族・当事者のアンケート調査」と
いう2つの研究を行った。さらに、多重債務
に関する相談におけるギャンブル問題の頻度
を明らかにすることを目的とし、研究3「債務
問題支援機関における病的ギャンブル問題
に関する研究」を行った。

・研究1「病的ギャンブルに関する家族の

認識と、変化のプロセス」の目的 : 病的ギ
ャンブラーのギャンブル行動が次第に進行し
ていく中で、家族がそれをどのように認識し
ていくかというプロセスについて、質的分析
を用いて明らかにすることである。そこで、
本研究では、アルコール問題を含む物質ア
ディクション以外のアディクションのうち、
生活に密接しており、かつ違法性がなく誰
もが罹患し得る疾患であり、正常から障
害の連続性からそれらの境界が曖昧であ
るがゆえに問題が表面化しにくい病的ギ
ャンブルに着目し、家族の病的ギャンブル
に関する認識と、変化のプロセスを明ら
かにすることで、変化の時期に合わせ

た介入方法を検討することを目的とした。

・研究2「病的ギャンブリングと家族関係に関する家族・当事者のアンケート調査」の目標：

病的ギャンブリングに関する心理行動および家族関係について、家族・当事者の両者に対するアンケート調査から、実証的に明らかにすることである。具体的には、家族関係や精神健康に関する心理テストの得点と当事者のギャンブルの心理行動の関係を調べることおよび、これらの所見に関する家族と当事者の間の違いを明らかにすることに取り組む。これによって、病的ギャンブリブラーの家族に対する援助の必要性や重要なポイントについて明らかにすることが目標となる。

・研究3「債務問題支援機関における病的ギャンブリング問題に関する調査研究」の目的：

ギャンブリングの問題が深刻化すると、借金の問題が生じることが一般的に知られている。しかしながら、国内の債務問題の支援機関において、病的ギャンブリングの頻度に関する調査は行われていない。今回われわれは、病的ギャンブリングの疫学調査の標準的なツールとして世界で最も広く使用されている South Oaks Gambling Screen (SOGS) の日本語短縮版を用いて、関東圏内の債務問題への支援を行っている関連機関、司法書士会に協力を依頼し、それらの機関におけるギャンブリングの問題の頻度について調査を行った。

B. 研究方法

研究1：病的ギャンブラーの家族に対する面接に基づく質的分析

対象

調査対象は、病的ギャンブラーの家族で、次の2つの条件を満たす者とした；1)SHG (SHG: Self help group 以下、SHG とする) もしくは回復施設に繋がっており、2)自己の経験を振り返って第3者に語ることのできる者。

尚、面接調査中に気持ちの動揺などの状態が見受けられた際には調査を中止し、必要な援助を受けられる点を保障した。これらの条件を満たす対象者に半構造化面接を行い、得られたデータをもとに継続的比較分析法による分析を行った後、理論的飽和に達したと判断された8人で分析を終了した。尚、対象の選定については病的ギャンブラーの回復施設スタッフより紹介を受けた。

研究手法

本研究は、実証的データに関して未だ十分な記述がなされていない病的ギャンブラーの家族を対象とし、家族を取り巻く状況の中でギャンブルに関連する問題が深刻化していくプロセスを家族の視点から記述していくことを目的としている。そのため、研究デザインは質的帰納的研究デザインとし分析手法にグラウンデット・セオリー・アプローチの継続的比較分析法を用いて分析を行った。グラウンデット・セオリーは、社会的プロセスと社会的構造を研究する方法であり、現実に基づいて、現象について包括的な説明を生成することを目的とし、特定の事象やエピソードを特徴づける社会的・心理学的ステージや相(フェース)を焦点化する(Polit & Beck, 2010)。本研究では、文脈から病的ギャンブラーとその家族の認識を明らかとしていくことが目的であり、ストラウスとコービンのグラウンデット・セオリー・アプローチを用いるのが適切であると判断した。また、継続的比較分析法とは、データとデータの比較、データとカテゴリーの比較、カテゴリーと概念の比較といった、帰納的過程を通じて、より抽象的な概念と理論を継続的に生成する分析法であり、比較することにより、分析の発展のそれぞれの段階を築く(Charmaz, 2008)。そして、理論的飽和とは、理論的カテゴリーに関して、これ以上データを集めることが何らかの新しいカテゴリー特性を示すこともなく、また創発するグラウンデット・セオリー

に関して、さらなる理論的な洞察を生みださない状態のことである (Charmaz, 2008)。

調査期間は 2013 年 8 月～9 月でギャンブラーの家族個人に面談し、インタビューする形式をとった。質問内容は調査期間全体を通じて以下の 8 項目で、家族から見てどうであったかという視点で研究者の質問に応じて随時語ることを依頼した；1) 1 日のうちギャンブラー本人 (以下、本人とする) と家族が過ごす時間とその時の本人の様子、2) 本人がギャンブルを始めたきっかけと、ギャンブルしている時間や内容、のめりこみ方の変化、3) 本人の精神的状態や症状及び変化とそれに対する本人の認識、4) 社会生活への影響とそれに対する気持ち、5) ギャンブルの状況やギャンブルに対して抱く思い、6) ギャンブルをしている自分に対する捉え方、7) 他者からギャンブルに関する指摘を受けた経験の有無と内容、その後の変化、受け止め、8) 治療経験の有無と内容。尚、これらの 8 項目についてはそれらが出現した時期を確認し、対象者と研究者がともに時間的経過を把握し照合するよう努めた。

さらに、インタビュー終了後に、次に挙げた内容で質問紙調査を行った；1) 対象者の属性、2) 既往、3) 治療経験・SHG 参加・施設入所状況、4) 医療・SHG の情報入手経路、5) ギャンプリング尺度、6) SOGS。尚、SOGS は臨床現場における病的賭博のスクリーニングとして Lesieur と Blume により開発された尺度 (1987) であるが、本尺度の利用において DSM- 診断基準と較べて一般市民における病的ギャンブラー数を過大に評価する傾向が報告されている (Stinchfield, 2002)。しかし、本研究では対象の条件に示した通り、既に SHG もしくは回復施設に繋がっている者を対象としているため、SOGS による過大評価の影響は受けにくいと考え、対象条件を満たすことを確認するための尺度として採用した。

厳密性、真実性の担保

本研究では、研究計画立案から分析に至る全ての過程でアディクション治療に携わり、かつアディクションに関する研究実績のある指導者より専門的知見に関する助言を得た。また、質的研究法を手掛けている研究者から分析内容についてスーパービジョンを受けるとともに、精神科領域の研究に携わる数名の研究者と、データおよび分析結果についてディスカッションした。さらに、対象者に分析結果を提示するメンバーチェックングにより確実性を高めるとともに、論文中に詳細な記述をすることで厳密性、真実性の確保に努めた (麻原ら, 2007)。

倫理的配慮

本研究は筑波大学医の倫理委員会の承認を得て行った。本研究の実施にあたり、施設責任者に研究概要とインタビュー内容を文書及び口頭で説明し承諾を得た。また研究協力者には個人のプライバシーの保護に最大限に留意すると共に、自由意思による参加、同意の撤回等について文書および口頭で説明し、同意書への署名をもって同意を得た。

研究 2 : 病的ギャンプリングと家族関係に関する家族・当事者のアンケート調査

対象

病的ギャンブラー (PG) の家族の自助グループを用いる家族に対して質問紙調査を行った。同時に PG 当事者の (Gamblers Anonymous 以下、GA とする) に通う者、及び依存症回復施設に入所する病的ギャンブラーに質問紙調査を行ったが、当事者は対照として用いた。

手続き

PG 当事者および家族の自助グループの利用者に質問紙を配布した。調査の趣旨や方法、倫理的な配慮を書面で説明し、了承した人に質問紙を記入してもらい、これを返信用封筒に密封の上、郵送にて回収した。家族からは 204 名、当事者からは 176 名から回答が得られた。この

うち欠損値が多かったものを除いた、当事者 165 名、家族 167 名について分析を行った。

評価項目・尺度

・基本属性

年齢、性別、現在の職業、過去の職業、1 週間の平均労働時間、家族構成についての回答を求めた。

・**病的賭博のスクリーニング・テスト SOGS (South Oaks Gambling Screen)** : 臨床現場における病的賭博のスクリーニングとして Lesieur と Blume (1987) により開発された 16 項目で構成される尺度である。

・**ギャンブルの動機・影響・対処の質問票** : 研究者が作成した自作の質問項目で、ギャンブルをする動機、影響、そうした問題への対処行動について、尋ねた。回答は、「1. とても当てはまる」～「5. 全く当てはまらない」の 5 件法により評定を求めた。

・**FACESKG -8** : オルソンが家族機能の測定用具として開発した円環モデル FACESKG -8 を立木研究室が日本の文化に則して、独自の質問紙として作成した第 4 版である。円環モデルは家族の集団凝集性を意味する「きずな (cohesion)」と家族の内的・外的圧力に対する家族の変化の柔軟性を意味する「かじとり (adaptability)」の 2 つの独立する概念から構成されている。「きずな」次元は家族の凝集性の程度によって、低い方から <バラバラ (disengaged)>、<サラリ (separated)>、<ピッタリ (connected)>、<ベッタリ (enmeshed)> に分けられ、「かじとり」次元は <融通なし (rigid)>、<キッチリ (structured)>、<柔軟 (flexible)>、<てんやわんや (chaotic)> に分けられる。「きずな」・「かじとり」の両次元ともに中庸に近づくほど家族機能の健康度が高く、極端に近づくほど病理度が高まるとされている

(西川、2006)。それぞれ、かじとりは -2 未満が「融通なし」、-2 以上 0 未満が「キッチリ」、0 以上 2 未満が「柔軟」、2 以上が「てんやわんや」を示す。また、きずなは -2 未満が「バラバラ」、-2 以上 0 未満が「サラリ」、0 以上 2 未満が「ピッタリ」、2 以上が「ベッタリ」を示す。

・**K6** : Kessler ら (2002) が開発し、古川・大野・宇田・中根 (2003) が日本語版を作成した、気分・不安障害等のスクリーニング・テストである。日本語版の信頼性、妥当性は川上ら (2006) によって評価されている。K6 は 6 項目からなり、「まったくない」(0 点)、「2. 少しだけ」(1 点)、「3. ときどき」(2 点)、「4. たいてい」(3 点)、「5. いつも」(4 点) の 5 件法で回答を求めて得点を採点し、6 項目の合計得点で評価する。川上らは、軽症の気分・不安障害を含めてスクリーニングをする際の最適カットオフ点を 5 点以上としており、本研究では回復途上にあり、精神的に比較的安定している者が対象と考えられるため、5 点以上と気分・不安障害のカットオフ点として採用した。

倫理的配慮

本研究は筑波大学医の倫理委員会の承認を得て行った。本研究の実施にあたり、施設責任者に研究概要とアンケート内容を文書及び口頭で説明し承諾を得た。また研究協力者には個人のプライバシーの保護に最大限に留意すると共に、自由意思による参加、同意の撤回等について文書および口頭で説明し、アンケートの返送をもって同意を得た。

研究 3 : 債務問題支援機関における病的ギャンブル問題に関する調査研究

対象

調査対象は 20 歳以上で、関東圏内の債務問題への支援を行っている関連機関における多重債務問題相談者 104 名とした。

研究手法

多重債務問題相談者に対し、日本語 SOGS 短縮版を用いて調査を行う。

・**質問票の内容:**ギャンブルの深追いの有無、ギャンブルの問題の自覚の有無、ギャンブルが原因による同居者との口論の有無、ギャンブルが原因による借金返済不能の有無、ギャンブルが原因による借金(家計、サラ金・闇金、銀行・ローン会社)の有無に関する質問を行った。

倫理的配慮

本研究は、独立行政法人国立病院機構久里浜医療センターの倫理委員会の承認を得た上で実施した。

・**対象者に対する人権擁護上の配慮:**対象者に対して、書面にて 調査の趣旨、方法、データは調査目的のみに用いられ、個人情報外部に漏らされないこと、協力は自由意志であり、調査票の提出後であっても、希望があった場合、速やかに調査を中止することを説明した上で、調査協力の同意を得ることとした。

個人情報の保護の方法については、個人の特定に結びつく個人情報は資料から削除し資料には新たな符号をつけ、連結可能匿名化してデータ票を作成した。協力機関にて作成したデータ票は、USB メモリーに保存の上、書留で郵送することとした。対応表は、研究終了後処分する。

・**対象者に対する不利益・危険性への配慮:**調査を受けることでの対象者の不利益はないことについて説明を行った。調査に対する質問や意見、万が一何らかの不都合が生じた場合にすぐ連絡できるよう、調査者の連絡先を記した説明書を配布した。

C. 研究結果

研究1の結果

1. 対象の概要

インタビュー当時の平均年齢は 43.6 歳 (SD: 9.7 歳、33-64) であり、対象者全員がギャンブラーの妻であった。また、職業はパート・主婦がそれぞれ 2 名 (各 25%)、会社員・カウンセラー・介護職・教師がそれぞれ 1 名 (各 12.5%) であった。家族が本人を評価する視点で SOGS の回答を求めた結果、平均得点は 16.5 点 (SD: 1.8 点) であった。

既往歴のうち、特にアディクションと関連するものを示す。既往のあるもの、傾向のあるものについて、家族から本人を見るとどうか、という観点から回答を得た。その結果、既往ありの回答があったものは女性のみであった。また、傾向ありの回答を見ると、鬱、アルコールが各 3 名、買い物、タバコ、気分障害が各 1 名であった。

医療機関、もしくは SHG の情報については、インターネットが 6 名、書籍・雑誌が 3 名であり、これらの手段で情報を得た後、クリニックや保健所、依存症セミナーに行き、病的ギャンブリングや SHG の詳細な情報を得ていた。

2. 分析結果

最終的にギャンブル問題に関する認識の変化には 4 つのステップがあり、理想のパートナーを追い求める、青天の霹靂の如く借金に遭遇する、怒りと不安が交錯する、追い込まれ、治療や施設に結びつく というプロセスを経ることが明らかとなった。このプロセスを説明するために、まず全体の要約であるストーリーラインを示し、その概念の説明をしていく。

1) ストーリーライン

厳しい躰、親からの期待等を受け、親の意に沿うよう <自分を抑える> という幼少期を過ごす。両親をはじめとした周囲の大人がギャンブルをする・しないに関わらず、ギャンブルに対する否定的な感情を抱いてはいない。ギャンブラー本人と出会ったときにギャンブラー本

人がギャンブルをすることを知っている場合とそうでない場合があるが、借金をしてまでギャンブルをしているとは思えない。ギャンブルに親和性のある者はギャンブラー本人と「一緒にギャンブルを楽しむ」が、一瞬でお金が消えることに衝撃を受ける、あるいはギャンブル場の環境に不快感を覚え、「ギャンブルに交換を持てない」者もいる。さらに、自分の思うような男性であってほしいとの思いから「相手を支配する」者もいる。

妻は夫が「ギャンブルしているとは思わない」。また、妻自身も仕事や育児に忙しく、夫が「つじつまの合わない言動をしても目を配る余裕がない」。このような状況であり、妻は夫から家事や育児の協力を得たいと思い、お願いをするものの、帰宅が遅い、あるいは休日も仕事に出かけてしまい「協力が得られない」。このことから、夫は家にはいない存在となり、妻が「夫の役割を果たす」ことで「家庭を維持する」。日常に翻弄されるため、妻は夫について「何かがおかしい」、浮気をしているのかもしれない等と「別の要因を疑う」ものの、ギャンブルや借金をしていることに「まったく気づかない」。そんな中、ふとした出来事で夫の借金が「不意に発覚する」。妻にとって借金は「恥」や「恐れ」であり、このショッキングな事実を無かったものとするために一括で返済する、あるいは家族が返済計画を立てて本人に返済させる。さらに、借金をした夫に対して「怒り狂う」、ギャンブルを継続していないかと心配で「追い詰める」などして「コントロールを強化する」ことで夫を何とかしようと思うものの、妻が思い描くようにはいかずにいつもイライラした状態になる。このような対応を繰り返すうちに家族は「何かがおかしい」という思いながらも「病気とは思いたくない」という気持ちと葛藤し、インターネット等を用いてSHGの情報を得て、そこにつながることでギャンブル依存症という病気を知る。SHGに通い始めた当初は夫の借金に問題があると思

い、借金を何とかしようということに意識が向く。夫が病気ということも受け入れがたいが、それ以上に妻が借金を返済すると本人は「身軽になる」ためギャンブルを継続することとなる（いわゆる共依存）という事実は受け入れ難いものである。しかし、ギャンブルをして借金を作ることを繰り返し、自分が何をしていても夫にギャンブルとそれに伴う借金を止めさせることができないという事実に直面し、夫がギャンブル依存症という病気であることを「悟る」と同時に、妻自身も落ちていく自分に直面し、心から他者に助けを求める。ここから、SHGの持つ意味が変わっていく。

2) 家族が病的ギャンブリングを実感するに至るステップ

以下に、(1) 幼少期の環境、(2) ギャンブルに関する認識のステップを示す。

尚、【 】はカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリー、【 】はコードを、8名の対象者をそれぞれID1~8とし、データをID-Fで示す。

(1) 幼少期の環境

〈自分を抑える〉

親からの期待を受け、それに沿うことができるよう努力をする。また、親の意にそぐわない言動をすることで「怒鳴られ」、「気まずい雰囲気になる」という経験を繰り返すことで、そのような状況にならないように振舞っていた。このような振る舞いは自分自身の意に沿うものとは言えないものの、親の期待、あるいは意に沿うことができるよう自分の感情を抑えていたことが語られた。

「中1までは、めっちゃくちゃ優秀で、すごい母親の期待を一心に背負っているような子で(ID3-F)」

「だから父の思いどおりにいけないと、すごく怒られて。父もすごいかんしゃく持ちだったので。自分が似てるなって思ったんですけど

ど、後から。もう、うるさくしてればすごく怒鳴るし。それよりうるさい声で怒鳴って静めさせるし。あと、学生時代に門限とかあって。それを超えると怒られるし。すごい気まずい雰囲気になってしまうので。父と気まずい雰囲気になりたくないっていう思いは。何かにつけて、父が気に入らないと、やっぱり怒られてたので(ID4-F)」

<周囲の大人はギャンブルをしない>

子どもが使用するガチャポンもギャンブルと考え、ギャンブルに対して批判的な捉え方をする家庭で生育した。しかし、後の語りからも、必ずしも親の捉え方をそのまま引き継いでいるとは言えない状況が伺える。

「私の父は賭け事が嫌いな人だったので、孫ができたときにガチャポンってありますでしょう。あれ見たときに、「あれは子供の賭け事だね」って言ったぐらいに、「子供のギャンブルだね」って、欲しいのが出るまでやりたくなっちゃうみたいなのところがありますからね、そんなことを言ってたぐらいの人なんで(ID7-F)」

<狭い世界で生きる>

結婚するにあたり「家庭に収まりたい」という理由から仕事を退職し、家庭という環境が主たる社会生活の場となった。このことで、家族以外の他者との関わりが減少し、結果的に家庭内という空間、つまり<狭い世界で生きる>こととなった。

「結局外の世界を、私は見たことがないので。働いてたといってもトータル5年間だったのでね。そこでこう、それこそ周りとか波風立てないように、自分を出さないっていう。それこそ私、結婚するまでの間だからってというようなことを思ってたので。だからちゃんと世間で生きてなかったって

いうか。社会人としての成長はなかったと思うので。で、家庭に収まりたかったんですよ。家庭で威張りたかったんだと思う(ID4-F)」

<心の底に仕舞い込む>

自己表現や他者との関係づくりに課題を抱えていたり、あるいは他者に話すことができない体験をしている。このような課題や体験を抱えつつも相談する、あるいは表現する場を有していなかったために、自分自身の心の中にしまい、感情に蓋をしていた状況があった。

「高校生のとき摂食障害もやってて、そういうこともきっかけ、家族とか仲間とかそういう、ずっとつながり続けてる何かの要因だと思うんですけど(ID8)」

「でも、ちょっと逸れちゃうけど、3人いて、皆ちょっと問題があるというか。私の夫はギャンブル依存症だし、2番目の子は旦那さんがすごい浮気をする人だとか、3番目の子は結婚できないけど赤ちゃんがいたりとかそういう意味では、それこそ私が思い描いていたような、当たり前な家庭を築いている人は誰もいない。なんらかの、男運ないよね、私たちとかって言って。最近は3人で喋ることもあまりないですけども、家庭を築くという上では、すごく問題がある。それぞれに問題を抱えている感じで、今生活しています(ID4-F)」

<周囲の大人がギャンブルをする>

周囲の大人、特に、家族にギャンブルが好きな者がいる。その家族とともにギャンブルの予想をしたり、一緒にギャンブルをしたりして育ったためにギャンブルに対する免疫が形成されており、ギャンブルをすることへの疑問や違和感を持たない状況にある。そのため、「ギャンブルに抵抗感が全くなかった」ことが語られた。

「あと私も競馬、うちの父の、父も、私の実の父もパチンコと競馬が好きで、やっぱりうちの中にも若干借金まではしないんですけどそのギャンブルの問題みたいなのは常に、まっパチンコ行って帰ってこないということとはよくあって、競馬なんかも新聞広げて、でもうちの場合は年に1度の有馬記念をみんなでやるみたいな、ちょっとそういう家だったので、何番にする、みたいなのはあって(ID2)」

「私も慣れ親しんだ環境だったので、親も代々家族中がみんなギャンブル好きだったので。はい。なので、ギャンブルに抵抗感が全然なかったので(ID3-F)」

(2) ギャンブルに関する認識のステップ (図1-1)

ステップ1 理想のパートナーを追い求める

元々ギャンブルに抵抗がない、あるいはギャンブルに興味・関心を持っていた者は、本人と一緒にギャンブルを楽しむ。一方、ギャンブルを好まない者は、ギャンブルやそれをする本人に対して抵抗を示したり、自分の意に沿うような方向に事が運ぶよう働きかける等をする。

ここでは、妻(彼女)が付き合い始める前、あるいは付き合い始めた頃から「世話焼き」をする等し、相手を自らの理想に叶うように働きかけることを示す。

<一緒にギャンブルを楽しむ>

ギャンブルに抵抗を示さない、あるいは興味・関心がある者は、本人とギャンブルを一緒にすることで楽しみを共有している。

「お付き合いしてる時から二人でパチンコ屋さんに行って、ということはずっとしてましたね(ID1-F)」

「なんで主人も話をしたりとか、最初に出掛

けたのは有馬記念ですからね。そう。場外馬券場に一緒に遊びに行きたいな。そう、初デートになるのかな、朝から出掛けたのはそこですね(ID2-F)」

<ギャンブルに好感を持ってない>

本人に誘われギャンブルを経験し、「お金があっという間に」なくなっていった体験をする、あるいはギャンブルによりすさんだ生活をしている本人を見て更にギャンブルに対する抵抗感を示す。

「最初、パチンコをやってみようよと誘われて、付き合ってたのどのくらいのときか忘れたんですけど。一回、私、一度もそういうのをやったことなかったんですけど、面白いよと言われて行ったんだけど、タバコとか音と、あの環境と、後は自分が使ったお金があっという間に、何分とかでなくなっちゃったっていうのがショックで、二度とやるまいと思って(ID4-F)」

「でも、付き合ってくださいって言われた時にパチンコする人は嫌だなんて思って。その頃彼の生活は結構ぼろぼろだったんですよ(ID6-F)」

<相手を支配する>

出会った当初は相互にコミュニケーションをとっていたものの、本人と一緒に過ごす期間が長くなるにつれて気になる点が出現し、無意識のうちに「世話焼き」をする等して相手を「コントロール」したいという欲求が出現し、「共依存みたいな形で相手を支配しようとする」ようになる。

「そう、無理矢理主人と私で、私もいわゆる共依存みたいな形で相手を支配しようとする力が多分強くて、子供を一人で育てるみたいなことは出来ないといって、結婚してもらわないと困るとか、戸籍をなんとかしないと

困るみたいなことを言ってなんとか自分の思う通りにしようしようとして、で、やってみましたね(ID2-F)」

「それでとにかく彼をコントロールしたかったし、自分の一部だから、自分の一部がちゃんとなっていないのが、もう。とにかくやる、そこが病的なところで、彼をちゃんとしないと、自分の事ができないから、あなたが早くちゃんとまともになって欲しいとずっと思ってたんですよ(ID4-F)」

結婚後、妻は家事や育児を手伝ってほしいという思いや一緒に過ごす時間を持ちたいという思いから、更に本人への「要求」が強くなる。そのため、【自分の意に沿う夫にしようと手を尽くす】。その結果、「喧嘩しないことのほうがない」状態となる。それに伴い本人は「仕事」という理由から、これまで以上に不在とすることが多くなる。このことが妻は「要求」を強め、結果的に「喧嘩」することとなり、本人は「そこから逃れ」ようとする。

「要求ばかりでしたね。なんでももっとこうしてくれないの、なんでもっとこの子にこうしてくれないのとか。なんで私に対してもっと優しさが無いの、みたいな。そんな追求の仕方をして、なんか気づかせようとしてたんですかね。そうですね。その時はもう、自分の愛でこの人を変える、ぐらいの。後半はですね。 にいる後半は、なんかそんな感じになってたと思います(ID1-F)」

「要求をすると怒る感じで。「仕事なんだからしょうがねえだろう」みたいな感じになって。そういうのがますますひどくなっていった。それで、発覚する1、2年前には子供にもあたるような感じになってて(ID6-F)」

「どんどん私が追いつめていくし、彼を。彼はそこから逃れたいと思ってギャンブルに行くし。(～中略～)それがあつた時というか、気がついたら喧嘩しないことのほうがない

というか、どんどん私は彼をコントロールしていきたくなつたし、彼はそこから逃れたいなつていったし。気がつけば般若のような顔をしてる時があるくらいになつていて、喧嘩の内容というか、なんていうのかな、やつてることつていうか、ほんと病的で(ID4-F)」

ステップ2 青天の霹靂の如く借金に遭遇する

このステップにおいて中核となるカテゴリーは「ギャンブルしていることを知らない・しているとは思わない」、借金発覚後に「ショックを受ける」の2カテゴリーである。

本人がギャンブルの仕事に就いている場合、あるいは仕事上常に帰りが遅く、週末も仕事に出かける場合、ギャンブルをしているのか、あるいは仕事をしているのかわかりにくい状況にある。

また、妻は本人が「ギャンブルしているとは思わない」し、妻自身も家事・育児や仕事に追われて「ギャンブルには意識が向かない」。日常に追われる妻は、本人に対して家庭内の事を少しは手伝ってほしい、少しは話を聞いてほしいと思ひ、そのことを要求する。

このような中、日々の生活において夫が「辻褃の合わない」ことを言つてその場から逃れようとしている印象を受けることがある場合でも、妻は夫の言葉を信じなくては行けないと思ひ込み、不安・不満を解決するための方策を取ることができない。この時、夫がギャンブルやそれに伴う借金という事実を妻に隠してあり、そのことで更に辻褃の合わない状況となるため夫婦間の関係がゆがむという状態が引き起こされる。これにより妻は、夫には頼ることができないのだという諦めに至り、「家族の事は妻が担う」ことで「家族を保ち続ける(努力をする)」。このような状況下で、不意に「借金が発覚する」。

予期せぬ、多額の借金という事実の不意に直面することとなつた妻は「ショックを受ける」。

借金はなかったものにしたいために「一括返済」し、夫が「病気とは思わない・思いたくない」ために「叱責する」ことで、借金する夫を「何とか更生させようとする」。そして、多額の借金をすることは「二度目はないだろう」とも思うことで日常を取り戻す。並行して、妻は夫が借金の事実をひた隠しにし、辻褄の合わない言動をして嘘をつき続けることに疑問を抱き、その原因を探るために「SHG に繋がる」。SHG に繋がり、これまでの「自分を振り返る」こととなり、借金の尻拭いという選択を取らなくなる。

<ギャンブルに気づきにくい環境>

ギャンブルの仕事に就いている、あるいは週末にも仕事がある場合、家族は本人がギャンブルしていることに気づきにくい。

「いや、もうネットで競艇をやっているの、全然分かんなかったです。タバコ臭いとかもないので、パチンコ行っているわけでもない。なので、インターネットで投票しているので、全然分からないですね(ID3-F)」

「外出して、これがマージャン、これが仕事とか、全然分かんないですし(ID5-F)」

また、そもそも【ギャンブルしているとは思わない】のであれば、そのような発想自体をせず、疑念を持つことはない。

「いや、もう全然分かんないの、私はまさか彼がまだギャンブルをやっているというのは全く思っていなかったの(ID3-F)」

「全くパチンコはしてないと私は頭の中で決めちゃってたから、パチンコやってるなんていうふうにも思ってなかったし。本当にうそが上手なんですよ、全く分からないんですよ。だから……(ID6-F)」

付き合い始めた当初からギャンブルをして

いることを知らされなければ【ギャンブルしていることを知らない】状態のまま過ごすこととなる。この場合も、ギャンブルをしているという発想自体を持つことはない。

「全く知らなかったです。ただ、今、思えばっていうか、クレジットカードを作ったっていうのは知ってたんですよ。それは誰でもお買い物したりするのに(ID4-F)」

「発覚した時に、10年騙されていたというか知らなかったの、あの時にというか付き合い合う時に、付き合い程度のパチンコがこんなにのめり込んでいたパチンコだと知らなかったし、ずっとやってたというのも知らなかったし、借金まであるなんて知らなかったの、でびっくりしちゃって(ID6-F)」

また、結婚・出産というライフイベントに遭遇した場合、家族形態が変わる。子どもが生まれた場合、妻は【子育てに集中する】こととなる。この時、家事や育児に対して周囲からの援助が得にくい場合は更に目の前のある現実に対峙することに「必死」にならざるを得ず、夫に関心が向きにくい状況になる。

「家庭内は今思えば私と子供しかいない、赤ちゃんしかいないという状況で、もう訳分からない、あまり覚えてないんですよ、必死過ぎて。帰ってきてても起きない。(～中略～)もう子供の事しか見ないみたいな感じで、ちょっとノイローゼチックだったんでしょね、きっと(ID2-F)」

「子どもも生まれたので、私は子育てのほうに夢中になっていったので、全く借金問題が出てくるとは、これっぽっちも思っていなかったですね(ID3-F)」

<違和感と信じたい気持ちとの間で葛藤する>

本人の「小さいじつじまが合わない」言動に

何かがおかしいという疑念を持つものの、「何かおかしいのかわからない」ために欲求不満な状態となる。一方、夫の言葉を信じなければいけないという認識となり、自分が夫に対して疑念を抱いているという事実を打ち消して【夫の言葉を信じ疑わない】ようにする。

「お金の面もそうだし、言ってることも、だっあって好きって言ってたじゃんって思ったのに嫌いって言うてみたりとか。コロコロ言うことが変わったりとか。全体的におかしいっていう(ID1-F)」

「彼と付き合ってからそういうことをしてはいけないという気にさせられてて、もうずっと彼が言ったことを信じる 私っていうふうになんかさせられるというか、なってるんですよ(ID6-F)」

< 夫のいない家庭で奮闘する >

「仕事」を理由に自宅に帰ってこない夫に対し、自宅に帰ってきてほしいと願う妻はその旨を伝える。しかし、「その度にいつも裏切られ」て「夫婦喧嘩」をすることとなる。また、家にいたとしても「自己中心的な感じ」で家事や育児といった家庭内での仕事に対する【協力を得られない】。この様な状況であるため、家庭の役割を妻が全て担わなければならず、妻が【夫の役割も果たす】こととなる。

「帰ってきて欲しかった ですけど、言ったところで帰ってこないから。強制もしないし。週末婚みたいな感じでした(ID1-F)」

「やっと帰ってきて。土日仕事だからって言うて出かけてちゃうんですね。私は彼がギャンブルをするって知らなかったけれども、とにかく帰ってこないから、「もうちょっと早く帰ってきて、帰ってきて」と言うのでいつもいつも闘ってて、その度にいつも裏切られて「どうしたらいいのかな」って。それで夫婦喧嘩というのはずっとしてました

(ID6-F)」

「そうですね。とても自己中心的な感じだし。今でもそうですけど、帰ってきて、ご飯食べてテレビ見てるか、寝てるか、どっちかみたいな感じでしたね。それがやっぱり、不満だったと思う……分らない。分らないですけど(ID1-F)」

「家に帰っても全部一人でやらなきゃいけないので、それも大変だったことで(ID2-F)」

「子どもに対するお父さんの代わりも休みにしなきゃいけないし。休みに、自分は車を運転できたので、車を運転して、二人の子どもと公園行って遊ばせたりとか。たまに母子家庭みたいなおうちもあるので、そのお宅のお母さんとお子さんを乗っけて、皆で公園に、休みの日に遊びに行つて。でもう、平日はお母さんやって、頑張りましたね。そうです(ID5-F)」

< 家族の在り方を考える >

家庭での役割を果たさない夫に対して不満があるものの、「別居とか別れるとかいう発想」は持たずに【家族を維持する】努力をする。一方、すれ違いの生活であり、喧嘩も絶えない状況となると、【離婚を考える】家族もいる。

「その時も、本当にこの人、頭がおかしいと思いましたが、別居とか別れるという発想は全くなくて(ID3-F)」

「夫はまたギャンブルできてたんでしようけれども。私は私で別のところに向いて。でも家族で頑張っていくんだっていう。もう、当時二人子どもが生まれていたので。やっぱりこの家庭も壊したくないし(ID5-F)」

「でもしばらくそういう状態でしたよね。なんかもう、終わりなんだっていう意識でいたんですけど、回復して、もらえるものだけでもらえたらいいや、みたいな感じだったんですけど(ID1-F)」

<ギャンブルしているという発想を持たない>

妻は夫が以前、ギャンブルをしていたことは知っていても、今現在も継続しているとは思っていない。そのため、ギャンブルをし続けていることには【全く気付かない】状況にある。しかし、違和感のある言動に「何か原因があるだろう」という思いを抱いており、「浮気でもしているのかな」と、【別の要因を疑う】。

「そうですね。変わった様子もなく、全く、ほんとに知らなかった。やり続けてるっていうことを。知りませんでした(ID4-F)」

「(ギャンブルをしていることは)全然わかんなかったですね(ID8-F)」

「携帯を見ちゃったんですよ、私が。結婚する前からとしてからと、彼の携帯を見たりかばんの中を見たりとかいうのはいけないことだと思って、ずっとしてなかったんですけども。ずっとそういうすさんだ生活が続いて。でも、なにか原因があるだろうから、なんだろう、なんだろう、とっていて。もしかしたら、私は浮気でもしてるのかなって思ったから携帯を見ようかな、と思ったんですけど。彼がずっと携帯を持っているんですね。だから、見れるすきもないし。別にしょうがないか、と。働きには行ってくれているみたいだし、私ももうちょっとして、子供が大きくなれば、働いたりして気も紛れるかなとか思ってたんですけど(ID6-F)」

<不意に気付く>

妻は夫がギャンブルをし、そのために借金を負っているという発想は持っていない。しかし、「行き詰ってくると、彼が話すわけじゃなくて、たまたまばれるみたいな感じ」で言い尽くされるように、日常生活の中の習慣的な、あるいは何気ない行動の中の思いがけない場面で突然借金の事実が発覚する。

「それはクリーニングを出そうと思って、スーツを、なんか入ってないか、スーツ持った途端重いから、財布が入ってるなと思ったんだけど、やたら重いので。私あまり携帯とかお財布って普段見ないんですけど、なんだこりゃって思って中を見た時に、明細っていうんですか、借りてきたお金の。なんだろうって見たら、見たことない額っていうか。いくら一、十、百、千、万って下から数えていっても、あの時300万とかだったと思うんですけど。なんかもう。なんか、なんか、なんか(ID1-F)」

「それは、1回目は本当にしょうもないんですけど、彼が定期入れを立ち上がった瞬間にバサッと落としたら中が全部出ちゃったんですよ。そしたら、サラ金のカードが十何枚バーっと出てきたんですよ。そうです。それで、「あれ、何これ！」みたいになって分かったんですよ、1回目は(ID3-F)」

「いや、もう全然分かんないので、私はまさか彼がまだギャンブルをやっているというのは全く思っていなかったんで、行き詰まってくると、彼が話すわけじゃなくて、たまたまばれるみたいな感じですね、どっちかという。「あ、借金があるんだって」と、「何に使ったの」と言ったら、「競艇」と言われて、「ええ、まだやってんの」みたいな、そんな感じですね(ID3-F)」

<事実に衝撃を受ける>

妻は、想像もしなかった夫の多額の借金という事実に衝撃を受け、「真っ暗っていうか、真っ白っていうか」、現実を直視するには余りに辛い状況に陥り、「本当に不安定」になる。

「それで出してしまってから、やっぱりそれはそれですごくショックなので、親に泣いてみたりとか。お金出してじゃないんですけど、いろんなお金をガツて失ったことに対してのショックで、本当に不安定になって

(ID5-F)」

「やってたのと思って、涙が止まらないは、その時で350万円くらいだったかな借金が。あるって分かった時の感じ、えーって。真っ暗ってというか、真っ白ってというか、なんなんだろうってという感じでショックでしたよね(ID4-F)」

<借金を無いものにする>

妻は、予期せぬ多額の借金発覚に衝撃を受ける。妻にとって家族が負った借金は「恥と恐れ」そのものであり、その受け入れ難い事実を打ち消すためにこれまでの貯蓄や保険を切り崩す等して一括返済をする。

「なんだろうな。お金に関してのことであるとか。やっぱり借金をサラ金から借りたっていうと、本当に恥だっというふうに思ったから、誰かに相談するとか、そういう発想が浮かばないんですよね。もう、とにかく400万って言われたら、それ返して、ないものにしないって。そっちに必死になってしまっ(ID5-F)」

「彼はゴメンとか謝ったり、もう二度としないうって、また同じことを言われるんだけど、でもそうやって言ってる姿が信じられないから、その時はもう。だけでも、誰にも言えないし、私もこんなことを。相談も出来ない、こんな恥ずかしいことって、もちろん思ってたし(ID4-F)」

「まあ、言ってみれば恥と恐れですよ。それで返しちゃったんですね。そうですね。まあ、最初は、私もこのサラ金っていう恥と恐れっていうものがあって、こんな思いをするのは自分一人がいいと思ったので、娘には言わなかったし、そのときちょうど母が東京から家へ一緒に住むようになっていたので、もう母にも知らせないように、こんな辛い思いをするのは自分だけでいいと思って全然言わなかったんですけど(ID7-F)」

「はい。もうその時は慌てちゃって、もう私が長年かけていた生命保険とか、あとは持っていたブランドのバッグとか全部売り飛ばしたりして、もう一括返済しちゃいましたね。その時は、まだ余裕があったので。きれいに、あっという間に、きれいに、魔法のように(ID3-F)」

「それを全部返してしまおうんです。返させるんです。夫に通帳だけ渡して。それで返ってきて、ゼロにしてきてって言って。夫はその100万を残して返してくるんですけど。自分が貯めてた自分の通帳からも、自分がおろしてきて、その現金を夫に渡しちゃったんですよ。だから、自分もすごい世間を知らないというか(ID5-F)」

「その返し方が、私もギャンブラーと同じでね、保険から借りて(笑)返した。なんだか同じことしてたんだ、って後で気が付きましたけどね、ずいぶん経ってから。そんな感じでした。そう(笑)。保険に積むとか家のローンするとかいうかたちで、いわゆる貯金額っていうのはそんなに多くなかったんで、そういうかたちで貯金をするみたいなかたちだったので、郵便年金とか、生命保険とか、ちょぼちょぼ。そうそう、そうです。融資できるお金の範囲っていうのがいくつかあったので、3、4件かな、そんなかたちで(ID7-F)」

<さすがに次はないだろう思う>

借金が発覚し、「神妙な感じ」で謝罪する夫を見て妻は「もうこれで終わりだろう」と思いつつ、借金をした事実は消えず、もう二度とこのような受け入れ難い事実に遭遇することは無いよう夫を教育する。

「でも、そういうとき彼は神妙な感じで、「もうしない」みたいな感じになるし、私もこれに懲りて、もうしないだろうとは思いましたよね(ID3-F)」

「その後多分問い詰めたんですね、夫を。大分、叱責するような感じで、あんな借金作っ
といて、ぐらゐの感じのことを言って。そし
たら結構、マージャンの借金がかさんだん
だっていうことを聞いたんですね。あ、違
う。ごめん、2回目だ。1回目は仕事の理由で、
それからまた4年間、もうこんなことないよ
うにしてねって言いながら、4年間また過
したんだ(ID5-F)」

ステップ3 怒りと不安が交錯する

多額の借金をした夫に対して妻は怒りを覚
える。さらに、また夫が借金をするのでは
ないかという不安に駆られ、そうならな
いように夫を教育しようとするが、夫
からは妻が思い描くような反応が得
られず、その反応を見た妻は日常的に
イライラとした状態となる。緊迫した
家庭環境は子供にも影響を与え、親を
怒らせないような言動を取ったり、あ
るいは親の姿を模倣したりするよう
になる。

妻は怒りをぶつける、あるいは言いく
るめる等して夫を矯正しようとするが、
夫の借金は繰り返される。その状態に
疑問を感じ、原因を探るために<ギ
ャマノンに繋がる>。この時、自
分の夫は「病気ではない」と思い、「問
題は借金」という認識であるため、借
金をする夫を何とかしようとする一
方、借金ばかりする夫を信じられず、
不信感を募らせる。

ギャンブルでギャンブル依存症につ
いての情報を得て、夫のギャンブルや
借金への対応方法を知る。その中で、
自分の言動も振り返り、自分の問題
にも気付くこととなる。

ここでは、夫の借金発覚後に怒りと
不安の狭間で夫を更生させるために手
を尽くす。しかし、繰り返される借金
に疑問を持ち、原因を探るためにギ
ャマノンに繋がったことで妻自身も自
己の言動を振り返ることとなった段
階を示す。

<昇華し難い感情と闘う>

借金をした夫に対して、とにかく【怒り狂う】

ことで状況を改善しようとする。

「雰囲気か。考えたことが……自分
だけはイライラしてたのが、すごい覚
えてます。いつでも怒れるっていう。
私いつでも怒るよって感じで(ID5-F)」

「喧嘩していましたね。けんかとい
うか、私が一方向的に「死ね」とか
言っていましたね。「死ね」とか、「
本当、あんなんか死んで保険金で暮
らしたほうがいい」とか、そんな
ことを言っていましたけどね(ID3-F)」

「私も心配になっているいろいろ
聞くけども、答えが響かない納得
できない、すごく微妙につじつまが
合わない気がするなと思って。でも
証拠がないから突き出して言えな
くてイライラしててって感じですか
ね(ID6-F)」

妻は夫を自分の力で何とかしたい
という強い思いから、「追い詰めない
と気が済まないみたいな感じ」に
なり、「必要な色んな追い詰め
方」をし、結果的に夫を【追い詰
める】こととなる。

「それは多分、私の執拗ないろん
な追いつめ方とか、怒りの表し方
だったりとか、それはギャンブルに
行ってたんじゃないのかと、そう
いう問い詰めをする時だったりとか
するんだけど、とにかく喧嘩が絶
えなくなっって、どんどん(ID4-F)」

「そう、しょっちゅうですね。で、
子供が第二子が産まれる時も女
性問題ってまたあったんですけど、
それも私もだめなんですけど、携
帯をロックしてるんですけど、い
つも。なんか寝落ちしてる時に
ついてんじゃん、見るとちょうど
やりとりしてるメールがあるん
ですよ。何これ、みたいな。どう
しよう、どうしよう、追いつめ
ない気が済まないみたいな感じ。
自分が(ID2-F)」

借金に直面し、不安と怒りに苛まれるものの、

子育てや買い物、仕事等で気分転換、あるいは他に意識を向けて【意識を分散する】。

「それでもやっぱりなんか一緒に行って買い物したりしてるうちに気が晴れてるとい
うか、自分が多分好きだったんでしょね、
うろろしてるだけで楽しいみたいな。で、
それで子供の用事で児童館に連れて行っ
たり、イオンに行ってフラフラしたり、でも家
帰ってきたらそうですね、自分で家事やって、
一緒に寝るみたいな感じで(ID2-F)」

「母が同居していたので。あと、やっぱり自
分が働いていたので、子どもばかりという
ことも全然なかったですよ。自分も忙しく働
いていたし、うちに帰ってきて、もうご飯食
べさせて、お風呂入って、お風呂入れさせて、
もう寝ちゃうみたいな感じだったし、母も手
伝ってくれていたんで、怒りは夫にはぶつけ
ますが、子どもにはなかったですね
(ID3-F)」

<子供が影響を受ける>

妻は夫に対して日常的に怒りをぶつける。時
に、その怒りは子どもにも向かう。そのような
場面にさらされ続ける子どもは母親の姿を模
倣する、あるいは怒りから身を守る術を身に着
ける。その姿を目の当たりにし、妻は自分の言
動を振り返ることとなる。

「私が支配、コントロールしてたんですよ、
なのでそれを妹にやったりしてますね。片付
けなさいとかいって、片付けないと叩くぞ、
パチーンみたいな。ドキッとします。私じ
ゃん、みたいな。叩くのはやめようね、って
言うんですけど、やってんだな、みたいな
(ID2-F)」

「あれ、怒らなくていいのかって思って。そ
れまで子どもがちっちゃかったりした時に、
怒ると絶対防御するんです、こうやって。ぶ
たれないように。それほどバンバンぶってた

し、怒ってたし。怒ってる？ 怒ってる？
とかって言ったりとか。そういわれることで
また腹立てて怒ってたりしてたんですけど
(ID5-F)」

<コントロールを強化する>

妻は「お父さんにちゃんとなってもらえば」
と、夫を教育する。それと同時に、家計を維持
するためにやりくりしつつ、借金の返済計画を
立ててそれに従って夫に借金を返済させてい
こうとする。

「お父さんにちゃんとなってもらえば。それ
さえうまくいけば、私もやりくり頑張るから
とかって。すごく鬼気迫るものを持ってたん
ですよ (ID5-F)」

「1月はそれぞれに返したのを領収書みた
いなのを持ってきたんですね。で、私ね、ま
た私も病気なんですけど(笑) 今まで返し
た領収書みたいなのを全部夫が出してきた
んです。それを全部ノートに貼り出して、会
社別にね。そんなことしちゃって(笑) あ
といくら残ってるんだとか管理しちゃって
(笑) もう私も病気(笑) 今から思うとね。
そう。で、あといくらぐらいだから、いくら
ぐらいずつ、ちょこっとずつ返していこうね
っていう話を筆談ですっとしてたわけです
よね。で、1月は持って来たんです、領収書。
で、それぞれの会社に貼ったんですよ、ノ
ートにね(笑) (ID7-F)」

<消えない借金問題に疑問を持つ>

手を尽くして借金返済をし、夫を更生させよ
うとするものの、借金は繰り返される。この状
況に【何かがおかしい】と思うようになり、そ
の原因を探るために【ギャマノンに繋がる】。

「なんかそういうことで借金の問題という
のがずっと消えなくてなんかちょっとおか
しいんじゃないかみたいなのがあって

(ID2-F)」

「え？」と思って、これはなんかおかしいなと思って、会社に行ってから、もうずっとネット検索していて、ギャンブルとか借金とか病気 というキーワードを入れたら、ギャンブル依存症ということが引っかかってきて、こんなことが世の中にあるのかなと思ったのが、この病気を知ったきっかけですよ。そうです。それでネットを見たのがギャンブル依存症ということを知ったきっかけなんです(ID3-F)」

「でも、これはちょっとおかしいよなあって思って。いろいろ当てはまることですよ、あれは、ギャンブラーの 20 質問とかに。だから、これは依存症なんだなあってことで、すぐにつながった感じですね(ID8-F)」

「一応私も援助職だったので、ああ、パチンコ依存症なんだなあって、すぐギャンブルと GA につながったという経緯ですね(ID8-F)」

「グループとか行くと、話されてることがみんな一緒なんですよ、家の夫と。何これって、凄い衝撃でした、グループに行った時に(ID4-F)」

<夫を問題と切り離す>

夫の借金が発覚した当初、ギャンブル依存症という疾患があるということを知らないため、【家族も(夫が)病気とは思わない】。

「病気だなんて、その時にも思ってない(ID4-F)」

「まさかそんな依存症みたいなものがあるというのは、全然思ってなくて(ID6-)」

ギャンブル依存症という疾患名を知ってもなお、自分の夫は【大丈夫と信じたい】という意識が働く。夫がギャンブル依存症であると認めることはこれまでの自分自身の頑張りが「間

違い」と認めることにもなると考え、本人のみでなく、家族も自分の夫が【病気とは思いたくない】ため、問題を借金に置き換え、【問題は借金】と「思い込もうとする」。

「だから本人もなかなか認めなかったんですけども、家族も私も、認めなくなかったんです。夫がマージャンなんかで数百万も借金を作ってしまう人だっているのを、本人よりも強いくらいだったと思うんです(ID5-F)」

「でも不思議な感じがしたというか、病気だあって、私もなかなか認められなかったんです。ギャンブルの、ギャンブラーのことも。ギャンブルするっていうのも、病気だなんて信じられないと思ってたし(ID4-F)」

「頑張ってきたし、とかって。それが間違っていて認めたら、もうなんか、今までの人生そのものが意味がないものになっちゃうじゃないけど、別になくてもいいんですけど。でもなんか、そういう間違いとか、失敗したとかっていうことを、認めなくなかったので(ID5-F)」

「はい。全くギャンブルの借金以外に嫌なところというのは全然私にはなかったんですよ。優しくて温和で、私の言うことなんでも聞いてくれて、子煩悩で、すごくまめに子どものこともみてくれて、もう本当穏やかで。別に頭もいいし収入もよくなっていったし、本当に嫌なところが全くなかったんです。でも借金だけが問題とと思っていました。はい。理解ができなかったですよ(ID3-F)」

「それが自分で思ってる世間的にいい家庭であったりとか、世間的にいい奥さんだったりとか、いい家庭だったりとか。いい暮らし、世間的に。理想のっていうふうに思い込んでいて。それを疑う余地を私はなくって。でもなんか本当に邪魔するのは夫の借金って思ってたので(ID5-F)」

「で、ちょっと様子を見て借金止まればなん

とかなるかもしれないという、なんか一筋の自分で勝手に作った希望。そこに向かってやってたんですけど(ID2-F)」

<夫の事が信じられない>

繰り返す借金と、それを隠すために語られる嘘とで、目の前にいる夫のことを「信じたいけど、信じられない人」と思い、「多重人格」ではないかと疑う。

「でも、大丈夫今度こそはってやるわけですよ、彼は。ハー、もうなんか涙あり、なんていう感じて言ったらいいんだろうな。あの変な感じていうのかな、なんか。真っ暗ですっていう感じで、簡単に言えないっていう。信じたいけど、信じられない人がここにいるみたいな(ID4-F)」

「依存症なんて知らなかったの、二重人格なのかなと。本当にそういう、なんか病気なのかと思いましたよね。ビリーミリガンとかはやってたじゃないですか。だから多重人格とか、本当にそっちを疑ってました(ID3-F)」

<自分も病気とは思えない>

ギャマノンに行き、ギャンブル依存症という疾患名を知る。そして、妻自身も病気であるといわれるものの、夫が病気ということ以上に「自分自身が病気だってことは、もっと信じられない」。

「家族が病気ですっていうことも言われるんです。ギャマノンでは、ギャマノンのメッセージとしては、家族もギャンブル依存症者から手を離して、自分を生きましようとか。私たちも病気なんて言われるんだけど、なかなか私も自分が病気とは思えられないというか(ID5-F)」

「自分自身が病気だっていうことは、もっと信じられなくて(笑)。今、笑えるけど、当

時は自分が病気だなんて思ってないし。ほんと恐ろしいことなんだけど、今も(ID4-F)」

「感じ方.....そうですね。なんで私が? って感じてしたけど、最初は。なんで私がこんなところに行かなきゃいけないの、みたいな。そういうやっぱり、まだ自分は上からの感じのところがあって(ID8-F)」

<借金への対応策を知る>

ギャマノンに行き、ギャンブル依存症に関する情報を得ることで【回復のイメージを追う】ようになる。

「1番初めにやらなきゃいけないことは、自分が無力なんだなって認めて、現実はもう、こんなぐちゃぐちゃなんだなっていうことを、ちゃんと認めて。自分もすごい重い病気なんですっていうことを心から言うことからしか回復は始まらないのに、私はその土台をそこそこにして、回復した人の話ばかり聞いてて、かな。そうでした(ID5-F)」

ギャマノンでは共通した問題を持つ者と情報を共有することができる。その中で、借金への対応策として【家族が夫を手放す】という方法を知り、実行できるようになる。

「ただ債務整理をして、もう利子とか付かない状態にして、それで主人のほうのお母さんが返してしまっ。それを主人は、このあと返していくって感じでいく予定らしいんですけど。もう私は何もノータッチで、それは(ID8-F)」

「額は少なかったですけどどうしても埋め合わせしなければいけないお金が20万くらいあると言われて、でも私はギャマノンにながってたので、そんなお金は出せませんみたいな(ID2-F)」

<自分自身の問題に対峙する>

ギャマノンに通うことで、【自分の問題を知る】こととなる。初めはその問題に気づかない、あるいは自分には問題がないという思いに駆られるものの、複数回通ううちに【自分の問題に気づく】ようになる。

「なんとなくだけど、こっち側にもなんか問題があるらしいかな、みたいなくらいだったんですけど。ギャマノンに通い始めて(ID1-F)」

「今考えると、旦那さんもすごい病気なんだけど、自分もすごく病気なんだなって。自助グループの仲間内でも、あなた重いよってよく言われてたんですけど、多分そうだと。多分というか、本当にそうなんだ(ID5-F)」

「書いてあるように何もしないっていうことだけはしてこなかったなっていうのが1番最初の印象で、無力、何もしないって捉えたんですけど、その時、何もしないってことだけしてこなかったな、そっかって、なんかすごいストンと入ってきて。それからちゃんと通うようになっていったんですけど、ギャマノンに(ID1-F)」

「もう6回も行く前に、3回ぐらいで、「あ、私がおかしいんだ」ということに気がついて、あの家もおかしい、私が生まれ育った環境もやっぱりちょっと普通じゃないんだということが分かって、もう衝撃でした、それが(ID3-F)」

「そのぐらいから、ギャンブラーをどうこうするとかではなくて、自分の問題として通わなきゃ駄目なんだなって、思うようになりました(ID8-F)」

ステップ4 追い込まれ、治療や施設に結びつく

SHG に繋がり、ギャンブル依存症に関する知識を得ること、自分自身を見つめなおすことで夫に捕らわれなくなる。そのため、<夫と

自分を切り離す> ことができるようになる。他方、夫の症状は進行していく一方であり、それを見ることで反応し、<妻も堕ちていく>。このことで、妻は心の底から他者の助けを求めるようになる。妻は回復のためのプロセスを歩み始めるが、夫は病みのプロセスを歩み続ける。夫が借金に追い詰められ、精神的健康を失った姿に直面した時、妻は「本当にこの病気って駄目なんだな」と悟る。このことが妻に「無力」を実感させ、心から SHG という存在とギャンブル依存症という病気を受け入れ、回復へと向かっていく。

ここでは、夫の症状に反応して妻も堕ちていくものの、夫のギャンブル依存症が妻の力ではどうにもならないことを悟り、回復へと向かう段階を示す。

<夫と自分を切り離す>

これまで夫が引き起こすギャンブルに起因する借金の翻弄されていたが、SHG に繋がることで夫の問題として認識できるようになる。

「その借金やらなんやらって、もう全部本人の問題だしって、ある程度切り離せて考えられるようになったから、ずいぶん楽になれたし(ID1-F)」

「その前にギャンブルのことが分かったから、凄く悩んだんだけど、一人で行ってもらおうと思って、私一緒にいたら、このままお互い病気を進行させるだけだなと思って(ID4-F)」

また、これまで経済的には夫に頼り切っており、夫が借金をすることは家族にとっては死活問題となってしまう。このことが妻の不安を高めていた。そのため、妻も【妻も経済的な自立を目指す】ために仕事を始める。

「ではなんか仕事を見つけなくてはと思って。前に勤めていた会社のとろこで空きが出

るかもって昔言われたことがあったから、頼みに行ってみたり。でもまだそれが1、2年先だと言われたから、どうしようかなと思って、その後ちょうどよくパートの仕事が見つかったから今はパートをして。ゆくゆくはできればもうちょっと、社員みたいな形で働いたほうがいいかなって思ってるんですけど(ID6-F)」

「そこから私自身も、そこからがほんとの始まりだったみたいな感じかな。私も、ちゃんと自分で自分のことが出来る人になりたいって、大人なんだけども、子供なんですよ。自分の世話を、ちゃんと自分で出来るようになりたい、自分と子供のことは、自分で出来るようになりたいって、その時、ほんとに。そこからなんか始まりだった気がしますね。仕事も又、し始めたりとか(ID4-F)」

<妻も追い込まれる>

SHG に繋がり、妻自身も自分の問題に向き合う。これまで「夫の問題」、「借金が問題」、「この問題を何とかしなくては」という意識が働いていたが、SHG に繋がりステップを踏むことで自身に向き合うこととなる。このことでこれまで認識されてこなかった、あるいは蓋をしていた問題が表面化し、【追い詰められる】ことで【妻も堕ちていく】。

「もうその時の雰囲気、分かった時、三回目が分かった時の。家の雰囲気.....なんだろうね、変な感じっていうか.....なんだろう、私自身は、四方八方塞がれたっていう感じで、身動きが取れないっていうか、どうしていいのか分からなくて、毎日泣いてて。(～中略～)そうなんです。異常な雰囲気。もう殺伐としてますとか、そういう感じじゃないんですよ。異様な雰囲気の家の感じ。ちょっと言葉で表すのは難しいんですけど(ID4-F)」

「そしたら、あ、なんか自分がもう、これ聞いてたら壊れていくなっていうか、駄目にな

っていく感をすごく受けたので、硬いものを指に挟んで思いっきり顔をガンガン殴ってたんですよ。(～中略～)車の中なんですけど、馬乗りになるくらいの勢いで。もう、ガンガン、ガンガン顔殴って。そういう自分になった時に、底つきだったですね(ID1-F)」

「ものすごくきつくて。それで、自分が買い物依存になって行って苦しみましたね。そこから買い物依存が発症しちゃって、自分自身が。逆に。もう借金だらけになりました(ID3-F)」

<他者に助けを求める>

借金をする夫を「どうしていいか分からなくて、とにかく藁をもすがる思いで」SHG に繋がる。そこで、初めて他者に「助けてください」と言うことができる。

「私はどうしていいのか分からなくて、とにかく藁をもすがる思いで、その時繋がったんだけど、一方で他人ごとというか、彼は。病気がしい、そうらしいっていうのは、多分、その時思ってるんだけど。なんとか、まだなるだろうっていう感じっていうのかな(ID4-F)」

「ただこういうスピーカーがあるらしいよっていう話を聞いて、先行く仲間の話を聞きに行ったりっていうことは何回かしてましたけど、ミーティングというかたちで出たことなく。初めてその時に、息子さんが繋がった仲間に、実はこれこれこういうことがあって、もう何も考えられないんです。助けてくださいって言えたんですよ(ID1-F)」

<病気の夫に直面し、悟る>

夫の底つきに直面する、あるいはSHGで仲間の話を聞くことで、妻も「旦那のギャンブルの問題は私にはなんとか出来ないんだ」と実感する。このことで「初めて無力になれた」こと

に気付く。

「ある意味、それまで自分が学んできたことの知識として、私の中では両手を広げていつでも待ってたというか、ダメダメなあなたでも全然かまわないし、みたいな感じでいたのにも関わらず、本当にこの病気で駄目なんだなって。こっちがどんなにどうこう思っても、ああ、駄目なんだって思ったんですよ、正直。その時初めて無力になれたような気がしますね。ああ、本当に駄目なんだなって。悲しかったですけど(ID1-F)」

「やっとギャマノンに繋がって私もいろいろ見ていくうちに、なんだこうだったのか、っていう旦那のギャンブルの問題は私にはなんとか出来ないんだって知って、それ知ただけで随分変わったみたいなんですね(ID2-F)」

<回復の可能性に賭ける>

「嘘」をつき続ける夫に希望を持たず、「離婚」を考える。しかし、「すごいそつきも病気なんだったらば」と思い、回復に賭けたいと思うようになる。

「離婚してひとり立ちしようと思ったけども、これがもし病気なんだったらば、しかもすごいそつきも病気なんだったらば、ここで治るんだったらここに懸けてみても1回ぐらいやってみてもいいんじゃないかなって思って(ID6-F)」

<妻が自身の回復を感じる>

こでまで「平気で怒ってた出来事」に遭遇した際、怒らない自分に気づく。このことが、妻自身に回復を実感させる。

「ギャマノン行って、3ヶ月ぐらいに、それまで平気で怒ってた出来事に出くわしたんですね。その出来事があったのに、まあいい

やって言って、怒らない瞬間があったんですね。で、あれって。なんで私怒らないんだろうって思って。で、家にそうやって帰ると、あんまり怒ることがないっていうことに気付いたって(ID5-F)」

研究2の結果

1. 対象の概要

当事者アンケートと家族アンケートにおける当事者の平均年齢は各々41.5±10.9歳、41.8±11.7歳とほぼ同じであった。家族アンケートで回答した家族自身の平均年齢は51.1±12.5歳であった。性別は、当事者アンケートと家族アンケートとも男性が90%を占め、家族自身は9割近くが女性であった。家族の当事者との関係では配偶者が51.8%で最も多く、以下子ども22.9%、母12.3%、その他6.6%、父5.4%であった。家族状況としては、当事者アンケートでは2世代同居26.8%、2世代同居(親と同居)22.0%、単身世帯25.0%が多く、家族アンケートでは2世代同居(子と同居)42.2%、夫婦のみ27.7%が多かった。当事者の職業について多い割合であったものは、当事者アンケートでは、サービス業38.5%、販売31.1%、専門的・技術的職種26.1%であり、家族アンケートでは、事務44.1%、専門的・技術的職種30.4%、サービス業22.4%であった。

2. SOGS

行っていたギャンブルの状況を表2-2に示した。1週間に一回以上おこなっていたもので10%以上ものは、当事者アンケートではパチンコ90.9%、スロット等のマシン20.9%、競馬16.7%、ナンバーズ・宝くじ・サッカーくじなど10.1%であり、家族アンケートでパチンコ92.0%、スロット等のマシン20.9%、競馬14.1%であった。

SOGS(病的ギャンブルスクリーニングテスト)では全例カットオフの5点以上で15点以上の

重症群が 64%を占めていた。

当事者および家族がつけた SOGS 得点の分布を図 2-1 に示した。5 点以上で PG と判断するとなっているが、当事者、家族の評価では全てが 5 点以上で、全員が PG と判断されたことになる。当事者評価では平均値が 15.9 ± 2.9 に対して、家族は 19.2 ± 0.80 であり、有意な得点差があった (ANOVA (Welch 法), $P < 0.001$)。当事者評価では 8 点から 21 点に広く分布しているのに対して、家族表では全て 18 点以上であり、家族は当事者よりも重症度を高く感じている者が多いといえる。

3. ギャンブリングの動機・結果・対処

ギャンブルの動機

ギャンブルの動機に関する因子分析の結果を、表 2-3 に示した。

主因子法により、固有値 1 以上を基準にして因子数を 5 とした。プロマックス回転をした結果を表 2-3 に示した。各因子は「現実逃避・麻痺」「人とのつきあい」「快の感情を得る」「不快な感情を減らす」「金を得る」と解釈した。

各因子に因子負荷量が 0.4 以上の項目について、信頼性係数を調べたところ「現実逃避・麻痺 0.921、人とのつきあい 0.867 快の感情を得る 0.772、不快な感情を減らす 0.694、金を得る 0.773 であり、高い内的一貫性が確認された。そこで各因子に属する項目の相加平均を尺度の得点とした。

本人と家族の 5 つの尺度の平均得点について、比較した結果を図 2-2 に示した。「快の感情を得る」については本人の方が家族よりも有意に高い平均得点であった (ANOVA, $P < 0.05$)。一方、「快の感情を得る」「現実逃避・麻痺」は当事者の方が家族よりも有意に高い平均得点であった (ANOVA, $P < 0.001$)。

ギャンブルの結果

ギャンブリングの結果 (影響) に関する因子分析の結果を、表 2-4 に示した。

主因子法により、固有値 1 以上を基準にして因子数を 3 とした。プロマックス回転をした結果を表 2-3 に示した。各因子は「借金と生活破綻」「期待した効果を得る」「虚無感に悩む」と解釈した。

各因子に因子負荷量が 0.4 以上の項目について、信頼性係数を調べたところ借金と生活破綻 0.773、期待した効果を得る 0.704、虚無感に悩む 0.714 であり、高い内的一貫性が確認された。そこで各因子に属する項目の相加平均を尺度の得点とした。

本人と家族の 3 つの尺度の平均得点について、比較した結果を図 2-3 に示した。「期待した効果を得る」「虚無感に悩む」の両方では、当事者の方が家族よりも平均得点が有意に高かった (ANOVA、期待した効果を得るで $P < 0.001$ 、虚無感に悩むで $P < 0.05$)。「借金と生活破綻」は両群で有意差がなかった。

ギャンブル問題への対処

ギャンブル問題に対する対処に関する因子分析の結果を、表 2-5 に示した。

主因子法により、固有値 1 以上を基準にして因子数を 3 とした。プロマックス回転をした結果を表 2-4 に示した。各因子は「相談・別のストレス解消法」「否認・責任転嫁」「ギャンブル行動の制御」と解釈した。

各因子に因子負荷量が 0.4 以上の項目について、信頼性係数を調べたところ相談・別のストレス解消 0.773、否認・責任転嫁 0.704、ギャンブル行動の制御 0.714 であり、高い内的一貫性が確認された。そこで各因子に属する項目の相加平均を尺度の得点とした。

本人と家族の 3 つの尺度の平均得点について、比較した結果を図 2-3 に示した。「否認・責任転嫁」では、当事者の方が家族よりも平均得点が有意に高かった (ANOVA、 $P < 0.05$)。「相談・別のストレス解消法」は家族の方が当事者よりも平均得点が有意に高かった (ANOVA、 $P < 0.05$)。

4 . FACESKG -8

FACESKG -8 のきずな得点による分類については、当事者の評価の結果では、「バラバラ」13.6%「サラリ」41.4%、「ピッタリ」41.4%、「ベッタリ」3.5%であった。一方、家族の評価では、「バラバラ」22.6%「サラリ」33.9%、「ピッタリ」40.5%、「ベッタリ」3.0%であった。「バラバラ」が多い傾向があり、特に当事者評価では家族評価よりもこの型が多かった。

FACESKG -8 のかじとり得点による分類については、当事者評価で「てんやわんや」14.5%、「柔軟」32.7%、「キッチリ」49.1%、「融通なし」3.6%であった。家族の評価では「てんやわんや」11.2%、「柔軟」33.2%、「キッチリ」50.0%、「融通なし」5.6%であった。

5 . K6 得点

図 2-7 に結果を示した。当事者による K6 得点の所見では、5 点以上の不安やうつ状態の可能性のある者は 60.2%であり、精神健康度の低下している者が多いことが確認された。一方、家族による推測では、75.8%が精神健康低下の状態であるとされた。K6 得点が 5 点以上と判断された者の割合について、家族と当事者で比較すると、家族の方が有意に高い割合であった（直接確率法、 $P < 0.05$ ）

6 . FACESKG -8 得点による分類とギャンブルの変数の関係

FACESKG -8 の 2 つの次元である「きずな」すなわち凝集性と、「かじとり」すなわち組織化と、ギャンブルに関する変数の関係を検討した。すなわち、2 つの各次元について標準的な値の群とそれより高い群、低い群の得点によって分けた 3 群の間で、SOGS 得点、ギャンブルの動機、結果、対処を比較した。この 3 群に分けるにあたって、オリジナルの方式で「2 未満」「-2 以上 2 未満」「2 以上」と分けるとどちらの次元でも高い群が極端にサンプル数の少ない群になってしまい、統計的比較が難しくなっ

てしまうので、標準の範囲を狭くとして、「-1.5 未満」「-1.5 以上 1.5 未満」「1.5 以上」とした。この方法を用い、きずな得点にもとづいた 3 群を「弱い絆群」「標準的な絆群」「強い絆群」と名付け、またかじとり得点を用いて分けた 3 群を「低組織化群」「中組織化群」「高組織化群」と命名した。

当事者アンケートの結果による分析

当事者がつけた FACESKG -8 のきずな得点による「弱い絆群」「標準的な絆群」「強い絆群」の間で、SOGS 得点とギャンブルの動機、結果、対処の得点について比較した結果を表 2-6 に示した。ANOVA により、3 群間で有意差があったのは、「現実逃避・麻痺」の動機。「不快な感情を減らす」動機、「虚無感に悩む」という結果、「否認・責任転嫁」の対処の 4 つの尺度の得点であった。この 4 つの尺度の多重比較の結果を図 2-8、図 2-9、図 2-10、図 2-11 に各々示した。4 つの尺度得点とも、強い絆群が最も低い得点で、弱い絆群が最も高い得点であり、「現実逃避・麻痺」の動機。「不快な感情を減らす」動機、「虚無感に悩む」という結果の 3 尺度では多重比較（Bonferroni 法）でこの弱い絆群と強い絆群の間で有意差を認めなかった（ANOVA）。

当事者がつけたきずな得点に基づき分類された「低組織化群」「中組織化群」「高組織化群」の間における SOGS 得点およびギャンブルの動機、結果、対処の得点比較の結果を表 2-7 に示した。有意差を認めた項目はなかった（ANOVA）。

家族アンケートの結果による分析

家族がつけた FACESKG -8 のきずな得点による「弱い絆群」「標準的な絆群」「強い絆群」の間で、SOGS 得点とギャンブルの動機、結果、対処の得点について比較した結果を表 2-8 に示した。ANOVA により 3 群間では有意差のある

項目はなかった。

「低組織化群」「中組織化群」「高組織化群」の間で、SOGS 得点とギャンブルの動機、結果、対処の得点について比較した結果を表 2-8 に示した。ANOVA により、3 群間で有意差があったのは、「ギャンブル行動の制御」の対処の得点のみであった。この尺度の多重比較の結果を、図 2-12 に示した。高組織化群が最も低い得点で、低組織化群が最も高い得点であり、この 2 群間で多重比較 (Bonferroni 法) で有意差を認められた ($P<0.05$)。SOGS 得点では 3 群間では有意差を認めなかった (ANOVA)。

6 . FACESKG -8 得点による分類と K6 得点の関係

当事者アンケートの結果による分析

FACESKG -8 のきずな得点に基づく 3 群の K6 平均得点は、「弱い絆群」 9.6 ± 7.1 、「標準的な絆群」 7.6 ± 6.7 、「強い絆群」 6.2 ± 7.2 であった。3 群間に有意差がなかった。しかし、図 2 - 13 に示す通り、「弱い絆群」と残りの 2 群あわせた群の 2 群間で K6 得点を比較すると、弱い絆群の方が有意に低いという結果であった (ANOVA、 $P<0.05$)。

FACESKG -8 のかじとり得点による 3 群の K6 平均得点は、「低組織化群」 9.5 ± 6.6 、「中組織化群」 7.7 ± 7.0 、「高組織化群」 8.1 ± 7.6 で、3 群間に有意差がなかった (ANOVA、 $P<0.05$)。

家族アンケートの結果による分析

FACESKG -8 のきずな得点に基づく 3 群の K6 平均得点は、「弱い絆群」 13.6 ± 7.2 、「標準的な絆群」 10.4 ± 7.2 、「強い絆群」 7.8 ± 7.2 であった。3 群間に有意差を認められた。多重比較 (Bonferroni 法) の結果は、図 2 - 14 に示す通り、「弱い絆群」と「強い絆群」の間で有意差があった ($P<0.05$)。

FACESKG -8 のかじとり得点による 3 群の K6 平均得点は、「低組織化群」 10.9 ± 7.1 、「中

組織化群」 10.1 ± 7.3 、「高組織化群」 16.0 ± 5.5 で、3 群間に有意差がなかった (ANOVA、 $P<0.05$)。多重比較 (Bonferroni 法) の結果は、図 2 - 15 に示す通り、「中組織化群」と「高組織化群」の間で有意差があった ($P<0.05$)。

研究 3 の結果

1 . 調査期間

調査機関は、平成 26 年 2 月から平成 26 年 12 月までであった。

2 . 調査依頼機関

関東圏において債務や消費生活等の問題への支援を行っている機関、3 か所で調査を行った。

3 . 研究参加者

多重債務問題による相談機関への来所者 104 名に対し調査を行った。

4 . 使用調査票

日本語 SOGS 短縮版を用い、カットオフ値は 2 点とした。

・質問項目

質問項目を下記に示した。

- ・ギャンブルの深追いの有無
- ・ギャンブルの問題の自覚の有無
- ・ギャンブルが原因による同居者との口論の有無
- ・ギャンブルが原因による借金返済不能の有無
- ・ギャンブルが原因による借金(家計、サラ金・闇金、銀行・ローン会社)の有無

5 . 調査結果

調査協力者 104 名のうち 9 名 (8.7%) が日本語 SOGS 短縮版 2 点以上であった。

D . 考察

1 . 質的分析の結果からわかる病的ギャンブラーの家族のプロセスの特徴

理想のパートナーを追い求める、青天の霹靂の如く借金に遭遇する、怒りと不安が交錯する、追い込まれ、治療や施設に結びつくという4つのプロセスを辿っていた。

本研究において、ギャンブラーがギャンブルにのめり込んでいくことに直接的に影響を与えているか否かまでは言及できないものの、1段階よりギャンブラーと家族との心理的距離近さが見受けられた。アディクションを持つ家族の関係、とりわけ夫婦間といった二者関係について斎藤(2009)はBowenの指摘を引用し、二者関係にある者が近づきすぎると相手を失うことを恐れて不安になるという悪循環に陥りやすいと述べている。特に交際中や結婚から第一子誕生までは二者関係となることが多く、この関係が近づきすぎる傾向にあった可能性が推察される。

さらに2段階、3段階をみると、ギャンブラー本人は家族に対してギャンブルをしているという事実、あるいはギャンブルにより負債を負っているという事実を打ち明けることはせず、自身でどうにも処理できない状況となるまで家族はその事実を知らずに過ごしていた状況が明らかとなった。このような状況になり初めて家族は負債の事実を知られるという経験をする事となり、家族はこの経験を通してギャンブラー本人に対して経済的な意味での安全感や信頼感を失うこととなる。さらに、借金が発覚する2段階とそれに対処しようとする3段階は短期間のうちに出現し、かつ複数回借金を繰り返すという観点から2・3段階を行きつ戻りつしている状況が伺える。病的ギャンプリングは病的ギャンブラーの家族や友人など、身近な人々に対して社会的、感情的、経済的に大きなダメージを与えることが報告されている(Hodgins, Shead, & Makarchuk, 2006; Petry, 2005)。大きなダメージを受けた家族は怒りと不安が交錯するものの、その対処を求めてSHGに繋がっていった状況が明らかとなった。

4段階で特徴的な点は次に示す2点である。1点目は、SHGに繋がることで家族がいわゆる「共依存」に直面することとなり、他者からの援助を要するほどの精神状態となることである。この時、SHGと医療とが連携して対象者の支援をしていくことも必要であろう。2点目は、ギャンブラーがいわゆる「底つき」を迎えることで初めて家族もギャンブラー本人が依存症であるという事実を受け入れるという点である。身体的・精神的・社会的に問題が表面化しやすいアルコールや薬物等のアディクションと比べてギャンブルは問題が見えにくく、そのことで家族がより状態を受け入れにくいという状況を招いている可能性が考えられる。

2. アンケート調査の分析結果からみる病的ギャンブラーの家族関係

アンケート調査では、FACESKG -8およびK6得点と、ギャンブルに関する変数の関係を検討した。当事者アンケートでは、FACESKG -8による「きずな得点」つまり凝集性のレベルが低い群ほど、不快な気分を低減したり、現実逃避するためにギャンブル動機や、ギャンブルの結果さらに虚無感を味わっており、更にギャンブル対処において否認・責任転嫁の方法を用いる傾向が強かった。K6得点もこの「きずな得点」の低い群は、それ以外の群より、有意に高かった。これらの所見からは、家族のきずなを感じられない状況になっている病的ギャンブラーは、現実逃避や気晴らしのためにギャンブルを行うが虚無的な気持ちに陥り、精神健康の低い状態であり、対処としても状況をうけとめない対応に陥っていることが伺えた。家族のきずなを感じられないことが原因で不適切なギャンブル行動に陥っているとい因果の方向性であるのか、不適切なギャンブル行動が家族のきずなを壊してしまうという因果の方向性であるのかは明確ではなく、両方の機序が重なっている可能性もある。

一方、家族のFACESKG -8の結果とギヤ

ンブルに関する変数のあいだでは、当事者の所見とは異なり、きずな得点とギャンブルの動機、結果、対処については認められなかった一方で、かじとり得点では組織化の高い群ほど、ギャンブル問題に対してギャンブル行動を制御する対応が少ないという結果が認められた。また K6 についても、FACESKG -8 の候組織化の群で得点が高く、精神健康が低下しているという結果であった。FACESKG -8 では、家族関係の組織化が行き過ぎるとその役割が硬直してしまい、かえってよくない効果をもつとされており、そうした考え方に一致する結果といえる。家族との関係が硬直化することとギャンブラー本人自身がギャンブルを主体的にコントロールする姿勢が乏しい(と家族が感じること)が関係しているという所見は、いわゆるイネープリングという状況を表していると思われる。今回の家族はギャマノンなどの自助グループに関わっており、イネープリングがかえって本人の自主性を妨げるという見方を学んでいることがこの結果をもたらしている可能性がある。但し、この結果は、当事者では異なっており、過度の役割硬直化の問題は、当事者より家族の方が意識していると思われる。

きずな得点が低い群においては、K6 得点が高いという結果は、当事者アンケートのみならず、家族アンケートでも確かめられており、家族のきずなが感じられないということは、精神健康の低下と関係していることははっきり示されている。

ギャンブラー当事者と家族の認識のギャップは、以上述べてきた FACESKG -8 関連の所見や質的分析以外にも以下のようなものが挙げられる。

- ・家族は当事者よりも、SOGS 得点の示すギャンブル依存の重症度、K6 得点の示す当事者の精神健康状態についてより重症であると認識している。

- ・ギャンブル動機について、家族は当事者よりも現実逃避や人付き合いを強く感じており、快

の感情を減らす動機は少なく感じている。

- ・ギャンブルの影響について、当事者は家族より、良い効果と虚無感の両方ともを強く意識している。

- ・当事者のギャンブル問題への対処法について、家族の方が当事者よりも不適切な対処(否認・責任転嫁)の認識が強く、適応的な対処(相談・別のストレス解消)の認識が少ない。

今回のアンケートを行ったギャンブラー当事者と家族は各々の自助グループで募集している。年齢・性別分布をみると、ある程度重なる家族の当事者とその家族員であると思われるが、当事者の被験者の方が単身世帯と答えた者が多いというように完全には一致していない。従って、両者のアンケート結果の違いが当事者と家族の違いそのものを示しているとは言い切れない。それでも今回の結果は、家族は当事者よりもギャンブルそのものやそれに伴う問題を深刻にとらえており、当事者が現実を十分受け止めないことへの苦しさを感じていることが示されていると思われる。当事者は、ギャンブルの影響をよく見ようとしながらも、虚無感を家族以上に感じているという矛盾した気持ちを抱えている。依存症者自身もある瞬間にはギャンブルをやっているむなしさを感じつつ、別に問題はないという否認的な態度に逃げ込んでしまい、そうした矛盾に曝され続ける家族は本人への複雑な感情に苦しみ、最終的には絆を失ってしまうと思われる。家族に対して、依存症のそうした両価的で矛盾した心理をもっていることなどを伝え、その理解や対応についてサポートしていくことが重要であるといえる。何より家族のきずなを失ったと感じてしまうと不適切なギャンブル行動につながりやすいこと、逆にいえばいろいろなことがあっても絆を完全に失わないでいることが適応的なギャンブルへの認識や対応を持つことにつながりうることを家族に伝えていくことも必要であろう。

なお、病的ギャンプリングの動機・結果・や

対処の尺度は FACESKG -8 と関係が見いだせているのに、重症度を測る SOGS 得点は、FACESKG -8 得点との間に明確な関係が認められなかった理由について検討した。1 つには SOGS が一旦問題があることを認定するとその後改善があっても得点が変わらない指標であることや、当事者のギャンブル問題を否認する傾向などが影響している可能性がある。

3 . 家族への介入についての検討

最後に家族への介入・援助について論じる。

質的分析ではギャンブル問題が深まっていくプロセスが主に明らかになり、その途上での介入が必要であることが示唆された。

特に、今回明らかになったプロセスの 2 段階目の借金発覚から 4 段階の治療や施設に辿りつくまでの介入について言及したい。

ここでまず、家族は借金が発覚した時点で借金の原因をギャンブラー本人に確認することが重要である。本研究において、借金に直面するものの、その原因となった事柄を確認せずに家族が借金返済を補填している状況が伺えた。このような場合、根本的な原因への対処をすることができないために同じ状況が繰り返される危険性がある。他方、一度目の借金発覚時に事実と異なる理由を告げられたとしても、借金が繰り返される場合がある。この時家族が借金とギャンブルとの関連に気付くことができるように、我々医療従事者や行政等は病的ギャンブルに関する情報を提供していくことが求められる。

一方アンケート調査では、その後の病的ギャンブルの成立・継続の過程における家族関係とギャンブル問題の相互作用を明らかにした。すなわち、家族関係のきずなの低下を感じる当事者では、精神健康の低下を来しており、そうしたつらい現実の否認や気晴らし違いのためにギャンブルを行うが、さらに虚無感をもたらし、否認・責任転嫁の対応を繰り返すという悪循環を生じている。家族は当事者より深刻

な状況を認識しており、そのためよけいに、本人の現実否認的なギャンブル行動に戸惑ってしまうといえる。家族に対して、ギャンブルに依存する心理やパターンを知らせ、巻き込まれない対応やコミュニケーションを支援することが重要になる。

以上のように病的ギャンブルの成立過程やそのダメージの深刻化を防ぐためには、自助グループと医療保健福祉などの専門機関が統合的な支援体制を組んで家族にもできるだけ早い時点から介入することが重要であり、支援の手段としては家族が本人の病態に巻き込まれず治療に向かうよう促す方法を伝えることが重要である。近年日本でもアルコール薬物依存症の家族に用いられ始めた CRAFT (Community Reinforcement and Family Training : コミュニティ強化と家族訓練) をギャンブラーの家族に用いていくことが役立つと思われる。

4 . 債務相談における病的ギャンブルの問題

病的ギャンブラーがギャンブルに関連する借金を抱えた場合、基本的には、本人が中心となり債務の問題への対応を検討していくべきである。大切なことは債務を必ず返済しなければならないと意識することではなくて、返済ができなくなってしまった状況について、何が原因となっているかを考えるきっかけとすることである。その上で、個々のケースのギャンブルの問題を深刻化させないために、債務に対してどのように対応するかを検討を行う。債務整理を棚上げする場合(債務があり続けることによるギャンブルへの気分的な抑止効果、自らのギャンブルの問題を考えることに意識を向ける効果)、月々の返済額を低額にして長期間の返済方針を立てる場合(債務が長期間あり続けることによるギャンブルへの気分的な抑止効果、月々の返済額を低額にして生活を切り詰めるというストレ

ッサーを軽減する効果)、債務整理を早目に行う場合(他の併存する精神障害の問題を抱える場合などに、債務を早目に解消することで過剰な不安を軽減し、自らのギャンブルの問題をみつめやすくする効果)等が考えられ、他にも有効な対応はあると推測される。

債務整理の方法の一つに、自己破産がある。自己破産については、下記の破産法の条項に規定されている。

・破産法 第 252 条(免責許可の決定の要件等)

第 1 項 裁判所は、破産者について、次の各号に掲げる事由のいずれにも該当しない場合には、免責許可の決定をする。

(4号)浪費又は賭博その他の射幸行為をしたことによって著しく財産を減少させ、又は過大な債務を負担したこと。

第 2 項 1 項の規定にかかわらず、1 項各号に掲げる事由のいずれかに該当する場合であっても、裁判所は、破産手続開始の決定に至った経緯その他一切の事情を考慮して免責を許可することが相当であると認めるときは、免責許可の決定をすることができる。

近年、ギャンブルの嗜癖問題への対応の議論や試みが活発に行われている。ギャンブルが原因であった債務を抱えたとしても、自らの問題と向き合い、誠実に今後への対応を検討している中で、自己破産の手続きが必要となることはあり得る。自らにギャンブルの問題がないと主張し、破産法第 252 条第 1 項の各号に掲げられた問題がないと判断されれば、裁判官により免責許可の判断が下されることとなる。しかしながら、ギャンブルにより債務問題が生じたということ、自らについて援助者らとともに深く考える貴重な機会が得られたことと捉えるのであれば、第 252 条第 1 項 4 号の問題が自らにあることを認めたと、今後の生活の改善策を検討し、第 252 条第 2 項の判断を仰ぐという考え方のほうが自然に感じられる。

今回の調査では、多重債務の問題を抱える者

の 8.7%に病的ギャンブルの可能性があるとの結果を得た。今後の債務整理等への影響が生じないように調査参加者の個人情報保護には最大限配慮し、性別や年齢等の個人を識別するデータとの突合せは行わないこととしたため、どのような群に病的ギャンブルの問題が多くみられたかについては評価できていない。しかしながら 2013 年度の樋口らの調査と比較しても、少なくとも同等程度のギャンブル問題との関連がある可能性が示唆された。

多重債務問題を抱える方々への介入や支援のあり方については、慎重に考えていく必要がある。病的ギャンブルは、慢性進行性の経過をたどる場合だけでなく、挿話性(ギャンブルの問題が深刻化した後でもギャンブルが止まり得る)の経過をたどることが知られている。

現時点で止めることができているギャンブルについて、自らに問題があることを自覚することは難しい。このためギャンブル問題の支援機関につながる前の早期の段階では、より丁寧な対応が必要となる。ギャンブルの問題が本人にあるということを見つけただけの介入は、拒絶感を強く持たれてしまうという逆効果になってしまうこともある。債務問題を扱う担当者は、ギャンブルを含め、どのような問題が生活を困難にさせているかということ、相談者とともに考えていくために、詳細な情報収集や問題整理を行うことが必要と考えられる。

E. 結論

病的ギャンブラーの家族関係に関する質的分析より、病的ギャンブルの成立過程における家族の認識が、理想のパートナーを追い求める、青天の霹靂の如く借金に遭遇する、怒りと不安が交錯する、追い込まれ、治療や施設に結びつくという 4 ステップを経ることが明らかになった。家族にとっては突然借金の事実を知り、その借金を無いものにし

ようと試みるものの、何度も繰り返される借金に疑問を持つようになる。そこで、家族が先にSHGに繋がったとしても、ギャンブラー本人が底つきを体験して初めて家族は疾患を受け入れるという状況が示された。まずはこの時点で、家族に借金とギャンブルの関係や依存症という見方を家族に示すことで悪化を阻止できる可能性がある。

アンケート調査では、その後の病的ギャンブリングの成立・継続を経た調査時点における家族関係とギャンブル問題の相互作用を明らかにした。すなわち、家族関係のきずなの低下を感じる当事者では、精神健康の低下を来しており、そうしたつらい現実の否認や気晴らし違いのためにギャンブルを行うが、さらに虚無感をもたらし、否認・責任転嫁の対応を繰り返すという悪循環を生じている。家族に対して、ギャンブルに依存する心理やパターンを知らせ、巻き込まれない対応やコミュニケーションを支援することが重要になる。

また、債務問題支援機関における病的ギャンブリング問題に関する研究では、多重債務の問題を抱える8.7%の人に病的ギャンブリングの可能性があるとの結果を得た。このことより、債務問題を扱う担当者は、ギャンブリングを含め、どのような問題が生活を困難にさせているかということを相談者とともに考えていくために、詳細な情報収集や問題整理を行うことが必要と考えられる。

F. 研究発表

1. 論文発表

- Arai.K., Oka.M., Motegi.E.(2014). Awareness of Pre-Alcoholic Status and Changes in Such Awareness Analysis of Narratives by Male Japanese Patients and Their Families , Journal of Addictions Nursing , 25 (1) .35-40.
- Owaki,Y., Morita,N.: Patient's type falling under the category of alcohol dependence,

harmful use of alcohol, and hazardous drinking and the direction of support in inpatients of gastroenterological medicine department. International Journal of Medical Council on Alcohol and Alcoholism, 49 :18,2014.

- Ogai,Y., Aikawa,Y, Yumoto,Y., Umeno,M., Sakakibara,S., Kadowaki A., Saito,T., Morita,N., Ikeda,K.: Prediction of relapse using implicit association test to Japanese alcohol dependence inpatients International Journal of Medical Council on Alcohol and Alcoholism,49: 8,2014.
- 池田朋広、小池純子、森田展彰、川合勇三、松本俊彦、稲本淳子、岩波明：措置入院指定病院に入院する違法物質使用障害者の実態調査 - 田印字における逮捕群と非逮捕群との比較から - 日本社会精神学雑誌,23(2):112 - 122 2014.
- 高原恵子、森田展彰、大谷保和、梅野充、幸田実、池田朋広、谷部陽子、阿部幸枝、近藤恒夫:薬物依存症者に対する就労支援に関する研究-薬物依存回復支援施設に対する全国調査から- 日本アルコール・薬物医学会雑誌 29(2):104-118 2014.
- 森田展彰:トラウマとアタッチメントの視点から見たアディクションの心理機序と援助、精神科治療,29(5): 593-601 2014.

2. 学会発表

- 森田展彰:薬物使用障害と自殺 - 2つの問題に共通する心理の理解と支援について-、第38回日本自殺予防学会シンポジウム「アルコール・薬物問題と自殺予防」平成26年9月12日.
- 森田展彰:依存症者のもつ子育ての問題に対する支援、平成26年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会分科会「依存症の当事者・家族の多様なニーズへの支援を考える」平成26年10月3日

- ・ 森田展彰, 新井清美, 田中紀子: 病的ギャンブラーの家族における精神健康とその関連要因. 第 34 回日本社会精神医学会, 2015. 発表予定
- ・ 新井清美, 森田展彰, 垣渕洋一, 新貝憲利: 危険な飲酒のプロセスに影響する要因の検討. 第 34 回日本社会精神医学会, 2015. 発表予定

G. 文献

- ・ 麻原きよみ, 大久保功子, 大森純子, 岡本玲子, 萱間真美, グレッグ美鈴, 横山美江, 吉岡京子 (2007). 3. 質的研究の評価基準、『よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートをめざして』(グレッグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江編著) (pp.32-36). 東京: 医歯薬出版株式会社.
- ・ Charmaz, C. (2008). 用語解説(抱井尚子, 末田清子監訳), グラウンデット・セオリーの構築 社会構成主義からの挑戦 (pp.199-201). 京都: ナカニシヤ出版.
- ・ Kessler, R. C., Andrews, G., Colpe, L. J., Hiripi, E., Mroczek, D.K., Normand, S.L., Walters, E. F. & Zaslavsky, A. M. (2002). Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. *Psychological Medicine*, 32, 959-976
- ・ 川上憲人, 近藤恭子, 柳田公佑, 古川壽亮 (2006) 成人期における自殺予防対策のあり方に関する精神保健的研究、平成 16 年度厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業)自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究 研究協力報告書
- ・ Lesieur, H. R., & Blume, S. B. (1987). The South Oaks Gambling Screen (SOGS): a new instrument for the identification of pathological gamblers. *American Journal of Psychiatry*, 144, 1184-1188.
- ・ 西川京子, 立木茂雄, 橋本直子 (1998). 家族機能度に影響を与える家族システムのきずな・かじとり因子の計量的研究 アルコール依存症者とその妻に対する質問紙調査の結果から、*家族療法研究*, 5(2) 9-5.
- ・ 西川京子, 立木茂雄, 橋本直子, 横山登志子, 安川友加里 (1999). 家族要因とアルコール問題を持つ Identified Patient (IP) の断酒・飲酒との関連 家族機能、共依存、家族グループ・自助グループ参加などの要因を中心に、*日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 34(1) 63-73.
- ・ Polit, D.F. & Beck, C.T. (2010) グラウンデット・セオリー (近藤潤子監訳), *看護研究原理と方法 第 2 班* (pp.260-261). 東京: 医学書院.
- ・ 斎藤学 (2009). 第 7 章 怒りの渦巻く家. 依存症と家族(pp.155-173). 東京: 学陽書房.
- ・ Stinchfield, R. (2002). Reliability, validity, and classification accuracy of the South Oaks Gambling Screen (SOGS). *Addictive Behaviors*, 27:1-19.
- ・ 立木茂雄: 家族システムの理論的・実証的検証 - オルソンの円環モデル妥当性の検討, 川島書店, 東京, 1

